

# 秩父宮記念学術賞の 記念懇談会

渡辺 兵力



記念懇談会で挨拶する日本学術振興会大崎仁理事長



1997 年(平成 9 年)  
5 月号 (No.624)  
社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150 円

## 目 次

|                                                          |    |
|----------------------------------------------------------|----|
| 秩父宮記念学術賞の記念懇談会… 1                                        | 報告 |
| 青年部・大学山岳部監督会議… 3                                         |    |
| 総務委・8 年度後期新入会員オリエンテーション… 3                               |    |
| 指導委・山岳スキー研修会… 4                                          |    |
| 海外の山… 5                                                  |    |
| 支部だより                                                    |    |
| 山形支部・冬の笹谷峠… 6                                            |    |
| 熊本支部・牛ノ峠山行… 6                                            |    |
| 山と医療・成人病と登山… 7                                           |    |
| 東西南北                                                     |    |
| データベース研究会の活動… 8                                          |    |
| ウェストン祭のポスター、記念手拭いをデザインして… 8                              |    |
| 山の歌の変遷… 9                                                |    |
| 秋山郷・鳥甲山を讀める… 10                                          |    |
| 図書紹介… 11                                                 |    |
| 『シッキムヒマラヤ学術登山報告書』『キャラバン東ネパールに行く』『ザイルを結ぶ男たち』『冬のデナリ』『雲水伴侶』 |    |
| 図書室受入報告… 12                                              |    |
| 会務報告… 13                                                 |    |
| INFORMATION … 14                                         |    |
| ルーム日誌・会員異動・住所変更 15                                       |    |

|                |        |
|----------------|--------|
| ▶ 日本山岳会事務取扱時間  |        |
| 月・火・木・土曜日      | 10~20時 |
| 水・金曜日          | 13~20時 |
| ▶ 図書室開室時間      |        |
| 日曜・祭日・月曜日を除く毎日 | 13~20時 |

### ■表彰行事は平成七年度で終了

故秩父宮雅仁親王殿下(一九〇二—一九五三)ご生前のご事績を記念し、日本学術振興会が昭和三十五年以来実施してきた記念学術賞は、一昨年勢津子妃殿下が薨去され、宮家(一九二—一九九六)が断絶となったことにもない、振興会としては残念ながら昭和三十八年度以来毎年行ってきた表彰行事を、平成七年度をもって終了することに決定した。創設から三十二回(受賞者三十五名)に及ぶ表彰行事を回顧する意を含めて、去る三月十九日、学士会館において振興会主催の記念懇談会が催された。

ご承知のように故秩父宮様は本山岳会の名誉会員(一九五〇)であられた。そして本賞の応募条件が「山」に関する研究業績ということもあつ

て、この行事の計画段階から本会は深く関わってきた経緯があり、当日の懇談会には行事に関係のあった山岳会会員が招待を受け出席した。会の運びは、はじめに日本学術振興会前会長の沢田敏男氏と第十四回受賞者の川喜田二郎会員による講演があり、そのあと審査委員、受賞者、関係者など招待を受けた参加者約百名が懇談の一時を過ごし、解散の時には「記念誌」が配布された。古い会員諸兄姉はこの表彰行事のことを承知しておられると思うが、参考のため簡単に触れておく。

### ■近代登山史上の先達だった宮様

故秩父宮様は、戦前のお元気な頃は各種の競技スポーツに興味をお持ちになり、自らもご体験されていた。その中でも自然を相手とする登山とスキーが一番お氣質に合致したのか、

ことのほか熱心に精進された。殿下の初スキーは大正十一年末の赤倉行にはじまり、大正十四年春まで、実に十一回もお出かけになられている。そのうちの八回は土日月とかけた往復夜行や日帰りという酷しい山スキー行であったにもかかわらず、吾妻・五色温泉周辺の山々の頂上を何度も踏んでおられる。

宮様の本格的な登山の第一歩は大正十一年の宮家創立翌年の七月、北アルプス燕岳・槍ヶ岳縦走、次いで十三年五月の立山・雄山岳へのスキー登山である。

宮様は大正十四年五月から昭和二年一月まで、英国オックスフォード大学に留学された。この間、十四年スコットランドのベンネビス峰登頂、翌年一月には、スイスで有名なアーノルド・ラン氏からスキーの指導を受けられた。そして同年(一九二〇)八月十二日、九月九日の二十八日間マッターホルンをはじめ四千メートル級五峰を含む十四峰の登頂に成功された。この登山は当時の西欧登山界から非常に注目をあび、英国山岳会は殿下を名誉会員に推挙した。

以上のスキーや登山では、故榎有恒氏がご指導を務められた。また宮様ご自身がお書きになったものから推察すると、自らの経験から、殿下は山・自然と人間の心・精神の

交流関係に深いご関心をよせられていたと拝察される。

宮様は日本の近代登山史上忘れることのできない先達のお一人であり、また戦前の登山界における第一級の登山家と申し上げて間違いはない。

### ■受賞者に多数の本会会員

本事業は、第三回までは日本山岳会が受賞該当の業績を推挙してきた。第四回から学術振興会に審査委員会を設置し、関係する諸協・学会から推された候補研究業績を毎回慎重に審査を行って、各年度の表彰(原則として一点)を決定してきた。

私はこれまでの個々の業績内容を承知していたわけではないが、研究題目と受賞者の資料から個人的な所感を述べると、次のように思い、かつ評価したい。

第一に、本賞が「山」に関する広い内容の科学的研究に授与されているという、選考の基本的な考え方に注目したい。近年、諸々の学術研究への評価の視野が細分化されて、各分野の専門的研究が重視されがちなのに対し、本賞は対象を山岳空間に限定してはいるものの、山岳地域の自然的諸構成要因についての個別研究成果(自然科学的研究)に限定せず、「山」自然の中で生を営んでいる人々を含む広い意味での文化(人

## 次代に残そう美しい山と溪

文・社会科学的研究)を研究対象とする業績をも視野に入れた学術賞であること。さらに近代科学発展の源泉の役割を持った探検的行動までも受賞業績に入っている。私見では、こうした広い視野に立った学術と呼び得る総合的な表彰事業であったことを高く評価したい。

三十二回の表彰のうち受賞業績は三十五点(特賞二点を含む)で、うち自然科学系二十三点、人文・社会を合わせた文化科学系九点、そして南極観測隊(第三、七回)と山岳会のエベレスト登山隊(第八回)の探検的行動三点であった。

次に研究対象を地域別に整理すると、日本の山岳地域十八点、ヒマラヤ地域十三点、その他四点であり、その他には世界・人類史を扱った「栽培植物と農耕の起源に関する文化複合の民族植物学的研究」(故中尾佐助会員)といった業績が含まれている。

さらに受賞者に目を向けると「山」に関する研究であるから研究者即登山家といえる人が多い(故人を含めて、本会会員が二十名近くになる)。自然の一部を実験室に持ち込む手

法の多い自然科学界にあって、研究者自らが山地を歩き回る野外法が主役である研究成果が、全てを占めているのが本賞の特色といえよう。

### ■山岳的研究活動の活発化を!!

秩父宮様はご自身の登山経験から、しっかりと山岳観をお持ちになっただけでなく、原理的には「山」で生活している人々も様々な山岳観を持って暮らしている。そこに「山」の文化がある。登山家もまた「山」の文化の担い手といえよう。昔から登山家は「山を知る」必要があると教えられてきた。実は「山を知る」ということは、簡単には説明しがたいが、優れた登山家は「山」全体のたえずまいを体験的に会得しているということであろう。「山を知らない」人にも判るように「山」について研究する仕事は、実は残っていると私は思う。かつて故今西錦司会員が提唱した山岳学と呼ぶ全く新しい研究分野がそれに近い。

秩父宮記念学術賞の行事は終わったが、今後も「山」に関する山岳学的研究活動が活発になることを期待したい。

## 報告

REPORT  
5月

## 青年部

全国大学山岳部監督会議  
開催される

壇上のパネリスト諸氏

日本山岳会の各委員会  
同好会の活動報告です。

青年部主催による全国大学山岳部監督会議が、一昨年東京で開催された。「遭難時における監督・コーチの法的責任について」と題し、明治大学の利尻岳遭難事例報告をもとに、湯浅道男愛知学院大学教授から、大学の取るべき立場、あるいは事故後の山岳部関係者の対応について、提言していただいた。

第二回同会議は昨年十一月三十日、神戸学生青年センターにおいて「大学山岳部の指導の現状と問題点」と題して開催された。

長年大学山岳部員の指導にあたってこられた文部省登山研修所専門員の柳沢昭夫氏に講演をお願いし、ついでパネルディスカッションを行った。パネリストには特徴ある指導を実践されている北海道の白石昌孝氏、東京の山本篤氏、愛知県の鈴木清彦氏、関西の鹿田勝氏、福岡の花田博志氏にお願いした。

開会にあたり、宮下秀樹副会長は「日本山岳会の先輩方は戦後、山登りに意気込みと信念を持ち、その執念には異様なまでのものがありました。中でも後輩に託すという気持ちが強くなって、自分の学校の後輩はもちろん、他の学校でも熱心な若者がいると積極的に指導しておられました。私自身もそういう先輩の恩恵に浴した一人ですが、根底には山登りが好きで、一人でも多くの若い仲間によい山登りをしてほしい、という思いは現在も変わっていないと思います。時々、自分のクラブの世話で手一杯だというような声も聞きますが、時には他の学校の方とおつき合いすることで、若い仲間の指導にも別な道が開けることがある、と信じております。

日本山岳会ではこのような交流を大切にし、それを応援するという立場をとっています。そしてこれは今後も続けていきたいと考えています。このような機会が若い仲間の育成に少しでもお役に立つようなことがあれば、幸いだと思っています」と語った。

柳沢氏は多くの体験談の後、「昔ある本に『教えるということとは共に希望を語ることだ』と書いてあるのを読んだ記憶があるが、コーチや監督が若い仲間に教えることは、今で

もやはり共に希望を語ることではないか、というのが私の結論です」と結んだ。

翌日、同じ会場で文部省登山研修所友の会の研究会の開催が予定されていたためか、百五十名近い岳人の参加があった。

最後にお世話いただいた関係各位に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

\*第一回会議録の在庫が多少あります。ご希望の方は送料(切手二百四十円)同封の上、日本山岳会青年部宛お申し込みください。(宇田川芳伸)

## 総務委員会

八年度後期新入会員  
オリエンテーション

三月十五日、ルームにおいて今年度後期の新入会員オリエンテーションが開催された。当日は、新潟、名古屋、豊橋、甲府など、遠路からの参加も含め三十名の新入会員、ならびに前期新入会員もお手伝いとして参加し、役員を含めると総勢五十二名の集いとなった。代表者に感想を述べてもらう。

「はじめまして、お邪魔します」と恐る恐る席に着く。村木会長の歓迎の言葉。中川常務理事の「組織と



活動」のお話の中でとくに印象に残ったことは「山岳会に何かを期待しても、山岳会は皆さんに何もしてあげられない。むしろ皆さんが自分自身で何をやろうとしているか、山岳会のために何ができるかである」という言葉であった。まさにここに日本山岳会の真髄を見た思いがした。

また、水野理事の記念講演「日本山岳会設立とウエストン」及び図書室の紹介は、その淡々とした語りか



ら、日本の登山史と山の書籍へのこだわりが感じられる大変興味深いお話であった。また、質疑応答を聞きながらそのレベルの高さに驚かされた。

懇親会の席では役員及び前期新入会員の方々との交流、神崎忠男常任評議員の飛び入り挨拶、同期会での浅間嶺への「サクラハイク」計画の披露と参加の呼びかけがあり、小倉常任評議員の「元気に登山を楽しんでください」との温かい言葉で開きとなった。素晴らしい出会いが得られた楽しい一日であった。

(NO二二四三五 富澤克禮)

総務委員の人手不足を参加者ならびに前期新入会員諸氏に手伝っていただき、無事に開催することができた。紙上をお借りしてお礼申し上げますとともに皆さんの今後の活躍に期待したい。

(熊谷友昭)

### 指導委員会

### 初中級者対象山岳スキー 研修会・志賀高原で開催

三月二十一日(二十三日)、志賀高原において当委員会主催の初中級者対象山岳スキー研修会が開催されました。東京でも桜のたよりがちらほら伝わってくるほど暖かな日が続く

三月でしたが、志賀高原では豊富な積雪に恵まれ、非常に中身の濃い研修会となりました。

当初予定していた木曾御嶽が宿舎の都合で開催できなくなり、急遽志賀高原に変更されたのですが、志賀高原には日帰りツアーに適した手ごろな山岳スキーコースが多く、初級者でも十分行程をこなせるような日程を用意しました。

今回の研修会には高塚武由主任講師(指導委員会委員・日本アルパインガイド協会所属)以下講師五名、研修生十三名の総勢十八名が、東京ほか大阪や名古屋、富山など全国各地から参加しました。

初日の二十一日は昼に平床地区にある成蹊学園寮に集合後、足慣らし



雪崩ビーコンとゾンデ棒を使って埋没者の捜索訓練をする研修生

とスキー用具の調整を兼ねて笠岳へのツアーを行いました。静かな林間

### 東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●〒101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●〒101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●〒112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

を抜けてのんびり歩いて行ける快適なコースです。

翌二十二日にはメインコースとなる焼額山から竜王山を経て小丸山にいたるツアーに出ました。一日中濃いガスに視界を遮られるあいにくの天候でしたが、高塚主任講師の適切なルート判断により、無粋なゲレンデを横切る時以外は、誰とも会うことのない静かなクラシカル山岳スキーコースの味わいを満喫しながら、充実した研修を行いました。この日の夜は懇親会で盛り上がったこともつけ加えておきます。

二十三日は危急時対策として宿舎近くの雪原で雪崩ビーコンによる捜索訓練と雪洞構築の研修を行い、午後一時に解散となりました。三日間の研修を終えた参加者の方々は、多くの技術や知識を体得した達成感と心地よい疲労感に満たされていたことと思います。

指導委員会の研修には「常連」となっているリピーターの方たちも多いのですが、二度三度といわず何回も参加することによって基礎技術をきちんと身につけていただきたいと思います。また新たに山岳スキーを中心とした冬山登山技術を修得したい、あるいは一層向上させたいと考えている方々も、ぜひ参加していただきたいと思っています。(熊崎和宏)

## 海外の山

### インターネットのヒマラヤ

江本嘉伸

電子ネットワークの普及で、移動そのものを目的とする冒険行や登山の世界は、随分イメージを変えた。

たとえば、この五月三日、カナダ側から北極点に歩いて到達した愛媛県出身の河野兵市と、ロシア側からカナダ側へ四度目の北極海横断に挑戦した山形県出身の大場満郎の場合、その前進の様子は、逐一インターネットで公開された。

アルゴス衛星が発信するデータから毎日、その日到達した地点の緯度、経度がわかるようになっていたのだ。たとえば二月二十三日に出发した大場は、五月一日現在、「北緯八十九度三十分」の水の上まで達しており、これは出発点から九六二キロ、めざす北極点までわずかに四六キロだ。

犬ぞりでシベリアからベリリング海峡を渡り、アラスカ、カナダ北極圏を経てグリーンランドまで、三年がかりの「極北二万二千里の旅」に挑戦した東京・東大和市のマッシー(犬ぞりつかい)小嶋一男の行

程も、ホームページにアクセスすれば概要が読める。四月末、東シベリア海まで達して今年の行動を終えたが、こちらは電話連絡がついたおり、支援者が到達地点と簡単な状況を書き込んでいた。

ヒマラヤでも、インターネットが活躍する時代に入ったことは、昨年五月十日の難波康子らのエベレスト登頂と遭難の際、証明された。どの隊もネパール政府の許可を取得しての登山ではあったが、カトマンズに入るよりはるかに早く、各隊のホームページによって世界は、あの出来事を知ったのである。

ここ数年の傾向として、エベレストのような山では南面、北面を問わず二隊や三隊は、世界のどの地とも直接電話やファックスができるインターネット・システムか、電子通信機能を備えているのが通例だ。

覚えてたのパソコンでいくつかの隊にアクセスしてみても、面白い試みを知った。

トッド・ブレソン率いるアメリカの「マウンテン・ゾーン・エベレスト登山隊」で、世界最高峰の山頂でユニークな科学的実験をやるうとしている。GPS(global positioning system)装置を使って「雪の頂上ではない、真のエベレストの山頂」

を究めようというのだ。

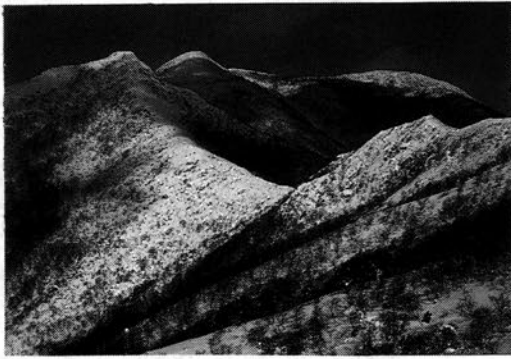
八八四メートルというエベレストの標高は、地上からの測量と天文学的観察によって決められたが、そこには多くの推定が入り、誤りは十分あり得る、とアメリカ隊の地球物理学者は、指摘する。

とくに、五五、六キロ離れた地点からの過去の測量は、雪の頂上を伝えるだけで、岩部分の「真の頂上」は全くわかっていない、という。

今回の登山ではGPS装置、コンピュター、など一八キロの荷を山頂まで担ぎ上げ、エベレストの頂上からじかに真の標高を測りたい、としている。

極地やヒマラヤからのホームページは、学校教育の現場に取り入れられ始めている。七大陸最高峰への最年少登頂、化粧品会社登山隊、日本女性第三登、など計画段階では相変わらず日本人の話題も多い春のエベレストだが、時代はさらにヒマラヤの「社会化」の方向へと進みつつある、という気がする。

ところで仮にアメリカ隊が測定できた場合、八八四メートルという標高は確実に下がる。それでも、雪の頂上の価値が減じることはないだろうが、どのくらい低くなるのかは興味がある。



冬の笹谷峠・二口峠方面を望む

## 山形支部 冬の笹谷峠

庄内に「三足一分山」という変わった名の山がある。古老の話では、

## JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

急峻な山に登る様子に由来するといふ。四十数年前に登った冬の笹谷峠（九〇六メートル）は、深雪のため「三足一分」的な状態であった記憶がある。雁戸山の元旦登頂を目標に閑沢から一日がかりでたどり着いたが、来る日も来る日も吹雪で停滞の連続であった。また峠の小舎に腰を落ち着けスキーに興じたこともあったが、この時も峠は深い深い雪に埋もれていた。

今年（二月九日）の笹谷峠はつば足でも登れるほど雪が締まり、スキーで登るには藪を避けなければならぬ状態だった。二時間足らずで到達した峠は、笹や灌木のみならず、黒々とした大地までもが顔を出していた。

ふた国の生きのたづきのあひかよふこの峠路を愛しむわれは

本県の生んだ歌人斎藤茂吉の歌碑は、青空のもとで西風を受け止めていた。この分なら冬季でも「ふた国であひかよふ」ことが可能に思えた。先ほど下山していった五人パーティーのトレースをたどり、カケス峰（一一四六メートル）に向かった。この斜面の記憶は、風で雪が締まり、不規則な凹凸にスキーを取られて苦労したことである。現実には、ブッシュをどのように避けて滑るかを考え考え登った。高度とともに増してくる

風だけが、かつての心の山と同じく、強く凍てつく冷たさだった。

陽だまりの頂で、全員が手を取り合って山行を喜びあった。足元から続く尾根筋には前蛤、蛤岳と奥羽の山並みが重なりあって二口峠へ伸びていた。どの山も白い斜面から木立ちが伸びるモノトーンの世界であり、冬とはいえ東北の山特有の温もりが伝わってきた。

地元高校山岳部が管理する峠の小舎で遅めの昼食をとった。もちろん、四十数年前の山小舎とは違っていても、場所と向き、木造と匂いは以前の小舎と同じであった。陽光の差し込む小舎は話をはずませた。そして、食事と山行の楽しみを倍加させてくれた。

それぞれ満ち足りた気持ちで靴紐を締め直し、帰路の準備を終えた。帰り際、寒風に逆らい目をやった朝日山塊と月山から本日の晴天終焉を知り、山形道笹谷インターチェンジに向けてスキーを走らせた。参加者六名。  
(木村喜代志)

### 熊本支部

#### 春季例会・牛ノ峠山行

三月十六日、宮崎県の南にある牛ノ峠（九一八メートル）で、春季例会山行を行った。

本田支部長のかねての計画である「千支の山登り」は、昨年のねずみ山（熊本・大分県境の小さな山）から始まった。今年は「牛」の名のつく山ということで、県内の山を物色したが該当する山がなく、結局宮崎県の牛ノ峠（等三角点注1）に決まった。牛ノ峠は、一九八一年十月、今西錦司先生が現宮崎支部長の大谷氏と共に登山され、「今西千五百山」の中にも記録されている記念すべき山である。

前夜は都城市郊外の安久温泉に総勢十七名が集合。大谷支部長差し入れの焼酎や、会員差し入れのビールで氣勢をあげ、英気を養った。

翌朝はあいにくの小雨となった。車に分乗して霧雨の高畑林道を進み、標高六〇〇メートルの登山口に車を置いて登りにかかった。

雨に濡れた山道を休憩を入れながら登り、五十分で旧牛ノ峠（八八〇メートル注2）に着いた。牛ノ峠は境界論争と天測点石柱で知られている。寛永四年、飢肥藩領民が牛ノ峠山中で船材の杉を伐り出していたところ、薩摩藩三股領民が境界が違ふことを理由に杉の搬出を拒否した。そこで飢肥藩は幕府寺社奉行に訴えたが、以後、約半世紀にわたり境界争いが続き、最後に飢肥藩の勝訴となったという論所跡で、境界標「従





牛ノ峠 (918m) 一等三角点の前で記念撮影

是東鉄肥領」と三面に彫られた石柱がある。

周辺は見事な照葉樹林が残り、スダジイ、アカガシ、ユズリハなどの樹木が繁り、ヤブツバキの赤い花がひっそりと春を告げていた。

峠から南国の照葉樹林の中を、フイトンチツドを十分に吸いながら十分ほどの登りで、一等三角点の牛ノ峠に着いた。頂上にはかなりの広場があり、天測点の大きな八角柱が立っていた。

ビールで乾杯し、万歳三唱して下山にかり、北東に柳岳、矢立峠、わに塚山へと続く稜線を下った。急峻な尾根道は、雨のため滑りやすか

ったが、霧に包まれた照葉樹林の中を神秘的気分になりながら三十分ほどで牛ノ峠(注3)に着いた。このころには雨もやみ、峠で小休止の後沢沿いに下り、車を置いた高畑林道へ戻った。

その後、都城市郊外にある国の天然記念物「関之尾鷗穴群」を見学し、霧島南麓の小さな温泉で汗を流して帰途についた。

後日、大谷支部長から伺った、今西先生と一緒に登山したときのエピソードを紹介したい。

当時、宮崎・都城間の高速道路は一般車にはまだ未開放だったが、その高速道路を道路公団職員が驚いて見守る中、パトカー先導で時速九〇キロのスピードで走り抜けたそうである。その時、今西先生が大谷氏に「今、何キロで走っているんや」とニコニコ顔で尋ねられたという。また「もし、地球が滅亡したら最後に残るのはあれや」と指されたので、道路脇にやたらと生えていた「セイタカアワダチソウですか」と聞き返したら、先生は「茅や」とぼつりと言われたそうで、今となっては想い出深い印象である。(石井久夫)

(注)「牛ノ峠」という名が、本文で三か所出てくるが、若干わかりにくいので補足説明したい。

コンサイス日本山名辞典には、牛

ノ峠の説明として「宮崎県日南市と北諸県郡三股町の境、標高六八三メートル」とある。これは本文中の最後に出てくる牛ノ峠(注3)で、明治時代に馬車道として開設された峠である。

この峠の上方、南西の尾根上に馬車道以前の古い峠があり、これが境

界標の立つ(旧)牛ノ峠(注2)標高八八〇メートル)である。

さらに、この峠の南西の山頂部に一等三角点の立つ牛ノ峠(注1)九一八メートル)がある。ここは三角点「名」が牛ノ峠であって、実際は峠ではなく、山頂である。

(田上敏行)

## 山と医療

### 成人病と登山

黒石 恒

中高年者の登山熱が目覚ましい昨今、こうした登山者の中には、成人病を抱えている人も少なからずいると思われる。新聞種になることは免れているが、山での事故死に、最近では心筋梗塞、脳出血などが関与している例があると聞く。心すべきことである。

成人病の患者が登山をしてはならないとは一概にはいえない。症状に応じた登山をするなら可能な例もある。ただし、登山の可否は主治医と相談して決めるべきで、自分で勝手に判断するのは危険である。また、投与されている薬剤の薬理作用などもよく聞いておく必要がある。登山中に、眠い、ふらつく、だるいなどという人に、服用している薬を見せ

てもらおうと、高血圧に対する降圧剤、時に精神安定剤などが投与されており、それが前記の不調の原因となっていることがある。精神安定剤には筋弛緩作用があり、眠気も起こるから要注意だ。

登山の滑落事故の隠れた原因として、薬が関与している場合もなしとはいえない。とくに注意すべきは、インシュリン、経口糖尿病薬を使用している人で、低血糖に陥らないように厳重注意すべきである。健常者でも運動量が多いと、低血糖に傾くことがままあるからだ。低血糖の危険については医師の注意義務があるから、聞いて知っているはずだが、老婆心ながら付記しておく。

高血圧症の人で変動の激しい人は指で測る軽くてコンパクトな血圧計が市販されているから、携行されることをお勧めする。同時に脈拍も表示されるタイプがあるので、歩く速度の指針に利用できる。ただし4000mを越す高度からは作動しないので、高所登山には不向きようだ。それ以下の山なら十分使える。

## 東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

### データベース研究会の活動を報告します

松尾良久

平成八年五月号の本欄に「パソコン通信の山情報について」という投稿をして一年が経過しました。そこで、この間のデータベース研究会の状況と今後の方向についてご報告します。

時代はインターネットに象徴されるように情報化時代へと急激な変化が進んでいます。当研究会としては「山岳情報のデータベース化は、日本山岳会の百周年に向けてのテーマ」という位置付けで、山口俊輔さんをリーダーに、月一度本会ルームにメンバー八名が集まり、検討してきました。

当会が蓄積してきたさまざまな山

岳情報記録は貴重な資産です。これらのデータベース化(情報のデジタル化)は会の総力をあげての協力体制が必要であり、また実現にはお金がかかることも事実です。

そこでまずできることから始めよう、ということと昨年度はパソコン通信の最大手NIFTY-SERVEに会報「山」のINFORMATIONの配信を続けました。さらにネットワークに関心を持つ会員の動向をリサーチし、十二月には「パソコン通信における山岳情報の現状」をテーマにルームで講演会を開催しました。

その結果、全国各地の会員約三十名からお便りをいただきました。会員の中には情報ネットワーク関係の専門家も多数おられることなどがわかりました。

さて、今年度は少し進めて「山岳

会情報のデータベース化」に向けて百年史、図書目録等の具体的なデータベース化の作業と、収録のためのガイドランス作成、山岳会のホームページ試作などを計画し、実行に移したいと思っています。

また、何よりもパソコン世代の中心である若い会員を含むE-Mail: [E-Mail]を持っていく会員の緩やかなグループ化(E-Mail: [E-Mail] 仲間の拡大)を推進したいと思っています。

パソコンとネットワークに興味のある会員のアクセスをお待ちしています。

(E-Mail: VYH05400@niftyserve.or.jp)

### ウエストン祭のポスター 記念手拭いをデザインして

信濃支部・金光義朗

「ウエストン祭のポスターを描いてくれませんか」と今は亡き高山忠四朗信濃支部長から言われ、お引き受けしたのが第十六回(昭和三十七年)のポスターで、題材は新緑の徳沢からの前穂だった。二十三回までは中版の大きさだったが、二十四回から大版になり、堂々としたものになった。

昭和四十七年か四十八年の何月だ

ったか定かではないが——というのは春と秋の展覧会に出品していたので——自作を見に美術館へ行くため、上野駅で下車し、新しくできた跨線橋の入口の前を通ったところ、「東日本観光ポスター展」という催しが、長い跨線橋の壁の全面を使って開かれていた。どんな作品がならんでいるのか興味を湧いたので、改札口を出ずにその方へ行ってみた。相当の数のポスターが延々と続く壁に、県別に展示されていた。

長野県はどんな作品だろうと見て行くうちに、二点出品されているのをみつけた。そしてそのうちの一点は、私の描いた第二十六回ウエストン祭のポスターだった。題材は前穂北尾根で、写真によるポスターが圧倒的に多い中で、独り気を吐いているように感じたものである。

これは「長野電鉄」が出品したものだと思われたが、この展覧会自体を知らなかったし、まして私の作品が出品されているなどということは目の前で見るまで全く知らぬことであつた。

他にも所用で他県へ出かけた折などに、思わぬところで自作に出会ったことが何度かあった。以来ポスターは、中断した何回かを除き四十回で打ち切るまで描き続けることができた。



記念手拭いは佐藤久一朗会員が亡くなられたあとをお引き受けし、記念ブローチは四十一回からで、ともに現在に至っている。

手拭いは染め物なので制約が多く、手間などの関係からも隣接した色同士の間を離さなければならぬとか、絵を描くような自由な表現は無理だとかいう面倒さがあるし、ブローチにも同様の不自由さがある。題材は現地性があり、多くの方々に親しみやすくと考え、もっぱら写生的な表現に終始している。それだけに取材範囲が狭くなり、長い年月になると苦勞が多い。

毎年三月にはそれぞれの画稿が完成し、実行委員長の田中弘美信濃支部長にお渡しする習わしで、本年もすでにそれは済んでいる。

「山を山麓から描く絵描きは数多くいるが、自らの足で踏みしめた山を描く絵描きは少ない。山を描くにはその山に入らなければ」というような意味のことを、かつて山岳絵画の大先輩、足立源一郎画伯(会員番号一五二四)がウエストン祭にみえられた折に、私に話してくださったことがあった。

ウエストン祭のポスター、記念手拭いには、私はそれだけの自負をもっている。

ウエストン祭五十周年という節目

に、私自身の仕事を振り返ってみた次第である。

## 山の歌の変遷

中村純二

「彷徨の歌」あるいは「街の子」として岳人の間で愛唱されている「そんなにお前はなぜ嘆く」の歌の由来について『山』六一八号(九十六年十一月号)に宮下啓三会員が記しておられる。これに関連して多少の補足を加え、併せて山の歌の移り変わりについても触れてみたい。

私は旧制一高旅行部に属し、大学では東大スキー山岳部(TUSAC)に在籍した。旅行部の先輩はなかなかハイカラな面もあったようで、大正十五年入学の赤羽治郎氏(赤羽孝一郎前信濃支部長の父君)なども、スキー場ではアーノルド・ランやシュナイダーの原書などよく読み、山では寮歌はあまり唄わず、ヨーデルや山の歌をよく唄ったと記しておられる(回想一高旅行部九ページ)。

大正七、八年頃、旅行部の黒田正夫氏らは高田でレルヒ中佐直伝の鳥居大尉から単杖スキーを教わり、大正九、十年には飯山で、これもレルヒ中佐直伝の市川退役中尉からツダルススキー術など教わった。坊主山で

シテムボーゲンやテレマークの練習に励んでいた尾形らは戯れに歌詞を作り、音楽に堪能な瀬名、音楽好きの沢本らは早速これに採譜をした(図1)。ここに採譜としてあるのは、どこからメロディーを借りてきたものである。その後このメロディーは「オバケ足がないと誰が云うた」などの替え歌となって永く唄われた由である(一高旅行部五十年九五ページ)。

さて問題の「彷徨の歌」であるが、大正十二年一高入学の旅行部員・佐藤藤三氏(深田久弥と同級)に平成四年にお会いして、当時歌われていたか伺ったところ、よく唄っていたと話され、数日後、歌をテープに録音して届けてくださった。これを譜にしたのが図2である。同氏は一高卒業後、東大地理学科に進み、西脇親雄、佐々保雄氏らと同級となり、北海道や八幡平など、ともによく歩かれたようである(東大山の会編『山と友』一二ページ)。このような関係で、「彷徨の歌」は佐々氏を通じて二高山岳部、さらにコーポルトヒュッテでの山形高との合同コンパで山高にも伝わっていった。

この歌の作曲者についても情報を伺いたく思っているうちに、佐藤氏は平成六年逝去された。最近、若菜未亡人に伺ったところ、「私は森鷗

外の娘さんの小堀杏奴さんと女学校が同級で、一高の記念祭などに於鬼さんらとも一緒にすることがあります。そんな縁であるいは「街の子」の訳詞が一高生の眼に触れ、当時旅行部には瀬名さんなど音楽好きの方もおられたので、唄われるようになったのかも知れません。しかし採譜などがどう行われたかなど全く判りません」とのことであった。

採譜といえ、西堀さん作詞の雪山讃歌もアメリカ民謡(Oh, My Darling)の親しみやすい曲から採譜されたもので、山のムードにもあったため、極めてポピュラーになったものと思われる。

### 【世界の山旅・辺境の旅】夏版総合カタログ(全108ページ)、ご購入下さい。

●ヨーロッパ、スイス・フランス・チロル・アルプス・ハイキング ●モンブラン登頂 ●カナディアン・ロッキーマウンテン・ハイキング ●アフリカ・キリマンジャロ登頂 ●英国の山 ●南米・ペルー・トレッキング ●パキスタン K2 エアサフトレッキング ●インド・ラダック ●中国・四姑娘山・トレッキング、天山山脈・トレッキング ●カムチャツカ・ヘリハイキング ●聖山カイラス・トレッキング ●マレーシア・キナバル山登頂 ●台湾・玉山・雪山登頂 ●日本の山旅 ●アメリカン・ロッキーマウンテン・トレッキング、ホイットニー山登頂 ●カザフスタンなど掲載しております。

※その他、個人旅行、登山隊、航空券手配なども承っております。

運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/IATA公認代理店  
**アルパインツアーサービス株式会社**

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911  
大阪 ☎06-444-3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557  
仙台 ☎022(265)4611 広島 ☎082(542)1660 札幌 ☎011(711)7106  
●詳細ツアー・パンフレットをご請求ください。(株)りんくう観光

## 一 彷徨の唄一



図3 昭和27年刊「ヤマで唄う歌」

## 彷徨の唄



図2 大正14年頃 一高旅行部の唄

作詞・尾形正作  
編曲・藤本貞利、沢本三郎 登山といふこと

図1 大正10年頃 一高旅行部の唄

時は移り、終戦直後、TUSACのルームでは、物資欠乏ともあいまって、よく歌が唄われた。二高からの山県登や山高からの雨宮淳三らとともに、私どもはよく「彷徨の歌」をはじめ、雪山讃歌や、そのメロディーによる「Ich will Kobolde im Reich haben」さらに当時はやりだした「スキ一の寵児」などを唄った。そして昭和二十九年には戸野・朝倉編の「山で唄う歌」が茗溪堂から出版された。これには朝倉君の姉君も音楽家として監修に参画されたので「彷徨の歌」は二部合唱になっており、図3を図2と比較すると、二行目が四小節であったものが五小節に改められたりしたほか、歌詞も三行目一番の「私の」が「私が」に変わっている。いずれにしてもこの歌集は当時山の歌として標準的な役割を果たした。

その後東大ではTUSAC LIEDなるものが定着して現在に至っているが、そこでは「ハイデルベルクの歌」「彷徨の歌」「Ich will Kobold」「スキ一の寵児」「Ich will Kobold」がこの順序で唄われ、「彷徨の歌」は巡り巡って再び東大に戻ってきたことになる。

このように山の歌に限らず、寮歌など口伝えに伝えられるものは、時代とともに内容も場所も変わってゆ

## 今年もさくらで会いましょう

くものらしい。これらを時に記録に留めることは時代の推移を眺めるうえからも興味あることと思われる。

現在、東大図書館にはベルリン、E・フライシエル社一九〇四年発行のシュミットボン著「街の子」が蔵されているが、この本には鷗外の蔵書印が押され、巻末には「街の子」の譜も載っている。しかしドイツ語の二倍以上の音節をもつ鷗外の訳文を、この楽譜で唄うことはできない。わが国では鷗外の訳文に着目した旅行部員辺りの誰かがこれに採譜したところ、たまたま山を愛する者すべての共感を呼び、このように広がり、同時にメロディーも少しずつ洗練されてきたのではなからうか。

## 秋山郷・鳥甲山を讃える

松岡 繁

露天風呂肌にまつわる紅葉かな

鉄梯子瘦尾根越えて屋敷の湯

友五人岩尾根越えはたのしけり

しずかなる鳥甲山さり難し

本会会員三人と岳友二人の五人で、昨年の十月十日〜十二日、秋山郷・屋敷温泉に行った。露天風呂と山菜、岩魚料理で十数品のご馳走だった。

十一日は四時半に起床。七時半に林道秋山線、鳥甲山登山口に到着し、登山道に取りつく。紅葉の最盛期で山道は錦に染まり、ため息と涙が出るほどに美しい。十時四十分白岳の頭着。程なくシラビソの林と高さ二メートルの熊笹帯が数百メートル続いた。岩稜や瘦尾根も、鎖があり、踏み跡も明瞭で、快適に登高することができた。

正午に和山集落と屋敷集落の分岐点に着き、鳥甲山に登頂。昼食をとり大休憩。急坂をかけ下り、十六時半に秋山郷・秀清館に着いたが、旅館も民宿も満員だった。夕暮れの県道を車で走行し、十八時に津南駅前の風巻旅館に投宿できた。

十日も十一日も晴天に恵まれ、苗場山、白根山、草津、岩菅山方面の山々も展望できた。日本名湯百選の秘境の湯に浸り、孤高の山の大岩壁を眺めて、最高の充実感にひたった。

## 図書紹介



イラスト 野田四郎

東北大シッキムヒマラヤ  
学術登山実行委員会・編

### 『東北大シッキムヒマラヤ 学術登山報告書』

一九九四年の第一次隊、九五年の第二次隊と、長いこと外国人に閉ざされていたシッキムヒマラヤのシニオルチューに、東北大長嶺山の会が遠征、見事登頂に成功した登山隊と、シッキムの医学、医療調査に当たった学術隊の報告書である。

一次隊はビザの取得に難渋したというが、二次隊のインド入りしてからの様々なトラブルも並のものではない。この諸々のトラブルが後の登山日程にも大幅な狂いを生じさせることになる。

学術隊も例にもれず、一喜一憂の事態に見舞われている。何事も現地に入ってからでないと確定できない

という状況である。まだ日本では馴染みの少ない地域への遠征であり、今後の参考になる点も多いと思う。登山隊長の登攀に関する総合的反省で述べていることは、これまたいづれの隊にも共通することであろうと思う。

(渡辺玉枝)

一九九六年八月 東北大長嶺山の会発行 B5判 一四八ページ

川村明夫・著

### 『キャラバン 東ネパールを行く』

表紙には表題のようにあるが、半分はカラコルムのフンザ紀行が占めている。チャムランとラカポシ登山隊に同行した医師が登山活動に参加し、現地人と接触した体験記である。両地方とも古くから日本隊が入りながら、あまり知られていない地域である。ヒマラヤ遠征に何度か参加している著者が、写真の力を借りないと表現できなかった、と書いているように、随所にカラー写真を配しているの、読みながらどのような場所にいるのか想像が付き、楽しく読むことができる。今後この地方を訪問する人に、現地人の活用や雇用そして現地生活のノウハウ、とくにイスラム圏での生活観の違いなど多くのことを示唆している。

最後に日本の休暇制度の貧弱さを嘆き、若い人たちが退職せずに連続休暇が計画的に取れるように提案しているが、山仲間には名案であり実施してほしいと思う。(南井英弘)

一九九六年九月 北海道新聞社発行 二〇一ページ 千六百円

山学同志会・編

### 『ザイルを結ぶ男たち』

山学同志会は一九五五年八月に創立された任意団体の山岳会で「学究的態度」と「合理的実践」さらには「積極的行動」とを骨幹とする「山を学ぶ同志の会」である。本書は四十周年の記念に何か小冊子を添えたいということで始まった計画だが、どんどん膨らんでいき、不思議な力を感じた、と編集者は述べている。

序章、谷川岳からヒマラヤへ、山学同志会の歩みにはじまり、第一部あの日あの時あの人と、はOBたちの現役時代の活躍やエピソード。第二部、ハーケン之歌が聞こえる、では山に逝った仲間たちが会報に書いた記録から。第三部、世界の高峰をめざして、は海外登山の輝かしい足跡の記録と思いの文章。第四部は若い会員たちが登山界の大きな様変わりを感じながら、自分の登山をどう築いていくかを集録している。

山学同志会は一貫して「ザイルを結ぶ男たち」の山岳会であり、多様化の時代を迎えても、仲間の善意と友情のザイルを離さない。

(三沢一三)

一九九六年十一月 山学同志会発行 三〇七ページ 限定三百部 非売品

西前四郎・著

### 『冬のデナリ』

第一部「旅立ちの夏」では主人公児島次郎たちがセント・エライアス登山のため、アラスカにやってくる。登山後、彼だけアンカレッジの大学に留学し、翌年には夏のデナリ峰登山を行う。そして詩人・ヒッピーのアーサーと冬のデナリ初登山計画を練りあげる。

第二部の「白い風の冬」では八名よりなる国際隊が厳冬のデナリ峰に挑むが、入山三日目にして隊員の一人がクレバスに落ちて死亡し、隊は動揺する。それでも登山を続行し、最終キャンプをデナリ・パスの下方に設営。ここから三名が頂上アタックに向かう。その夕方から山はブリザードが吹き荒れ、アタック隊は帰ってこない。待つこと三日目には隊長ら二人が救援を求めて下山、五日目には食糧も尽き、次郎ら二名もあ



きらめて第三キャンブへ下って行く。一方デナリ・パス(五五五〇メートル)ではアタック隊三名の壮絶な死闘が零下五〇度、風速五〇メートルの中で繰り広げられる。その描写の迫真力はすごい。主人公次郎(またはジロー)は著者自身である。

第三部「みどり甦る季節」では著者西前四郎自身が、生き残りのメンバーのその後の人生を描きながら、冬のデナリ登山の意味を探る。

著者は後書きに「この山行に参加したことを誇りにしながら、一方で嘆き、悲しみ、怒り、屈辱など人の記憶の中にある感情の激を抜いかねていました」と書いている。登山後三十年が経過し、心の内奥にあった激を本書で見事に描き出した。三十年前の写真も瑞々しく美しい。

本書の刊行を目前に急逝された著者に感謝の意を込めて合掌したい。

(田村俊介)

一九九六年十一月 福音館書店発行  
四四五ページ 税別千七百円

石田兵七・著

『雲水伴侶』

著者は明治三十二年、本牧の大地主の家に生まれ、昭和五年の横浜山岳会の創立委員であり、二十六年間にわたって山岳会の運営に貢献され

た方である。

そして「この写真集は大正五年頃から昭和三十年頃までに写したものを集めました。当初、このような写真集を発行することは全く考えていなかったため、整理、保存を粗末にしていたので、不鮮明な写真が多いのはご勘弁願います。大正から戦前までの作品はガラス板の乾板といわれるものです。本牧周辺の写真は昭和三十年代のものが多いのですが、古くは七十年以上も前の写真で、今ではその風景を見ることはできません。…略…また、私の歴史も載せたりしたので、少々恥ずかしくもありませんが、これもご勘弁願います。九十四歳、呆老人」と述べています。写真集は四章に分かれ、その間にエピソードを挟んで興味深く編集されています。

第一章、青春の上高地は、昭和五年当時の焼岳、枯れ木が乱立する大正池や徳本峠から見る穂高、梓川と焼岳の煙など。第二章は丹沢山塊、第三章は本牧近郊の写真、第四章は春秋光陰として、大正時代の本牧風景があますところなく伝えられています。(奥野幸道)

問い合わせ先・〒二三一 横浜市中区小港町三一七六 石田薬局  
石田栄一 TEL・〇四五・六二二一  
七九二〇

### 書籍受入報告 (1997年3月)

| 著者              | 書名                                                                   | ページ・大きさ    | 出版元             | 出版年  | 寄贈/購入       |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------|------------|-----------------|------|-------------|
| 徳久球雄            | 山に寄せる心                                                               | 212pp/19cm | 玉川大学出版部         | 1997 | 著者寄贈        |
| 安原真百合 他(編)      | ガッシャーブルムII峰 1988年夏:日本女子登山隊の記録                                        | 111pp/26cm | 日本女子登攀クラブ       | 1996 | 発行者寄贈       |
| 都岳連連対策委員会(編)    | 山のピンチ手帳 [再版]:安全に下山するために                                              | 68pp/19cm  | 東京山岳図書出版局       | 1996 | 編者寄贈        |
| 西前四郎            | 冬のデナリ:冬期マッキンレー初登頂(福音館日曜日文集)                                          | 445pp/19cm | 福音館書店           | 1996 | 中村久住氏寄贈     |
| 串田孫一 他(共編)      | 岩手山(日本の名山 第2巻)                                                       | 251pp/20cm | 博品社             | 1997 | 出版社寄贈       |
| 大蔵喜福            | 彼ら「挑戦者」:新進クライマー列伝                                                    | 319pp/20cm | 東京新聞出版局         | 1997 | 出版社寄贈       |
| 小島鳥水            | アルピニストの手記(平凡社ライブラリー No.175)                                          | 306pp/16cm | 平凡社             | 1996 | 出版社寄贈       |
| 山本正嘉            | 日本チョーオウ学術登山隊1995報告集                                                  | 62pp/26cm  | 山本正嘉(私家版)       | 1997 | 著者寄贈        |
| 横山厚夫            | 山書の森へ:山の本-発見と探検                                                      | 251pp/19cm | 山と溪谷社           | 1997 | 著者寄贈        |
| 北村節子            | ピッケルと口紅:女たちの地球山旅                                                     | 223pp/19cm | 東京新聞出版局         | 1997 | 出版社寄贈       |
| 我孫子登山倶楽部(編)     | 続・利根川領域の五十山                                                          | 180pp/26cm | 我孫子登山倶楽部        | 1997 | 発行者寄贈       |
| 一高旅行部縦の会(編)     | 回想一高旅行部                                                              | 61pp/26cm  | 一高旅行部縦の会        | 1997 | 発行者寄贈       |
| 橋谷晃             | ネイチャースキー:スキーで楽しむ雪の森のハイキング                                            | 183pp/22cm | 山海堂             | 1997 | 出版社寄贈       |
| 栃木県庁谷峰会(編)      | さらなる山をめざして:KR4峰遠征報告書 1996                                            | 102pp/30cm | 栃木県庁谷峰会         | 1996 | 発行者寄贈       |
| 沙謙中(編)          | 賞蝶篇 [上巻] (陽明山國家公園解説叢書 No.1)                                          | 187pp/21cm | 陽明山國家公園管理處      | 1994 | 高峰遍歴隊寄贈     |
| 沙謙中(編)          | 賞蝶篇 [下巻] (陽明山國家公園解説叢書 No.2)                                          | 191pp/21cm | 陽明山國家公園管理處      | 1994 | 高峰遍歴隊寄贈     |
| 沙謙中(編)          | 賞蝶篇 [導引図鑑] (陽明山國家公園解説叢書 No.3)                                        | 161pp/21cm | 陽明山國家公園管理處      | 1994 | 高峰遍歴隊寄贈     |
| 佐々木民秀・鈴木裕子(編)   | 日台友好玉山・雪山親善登山報告書 (1996. 10/26=11/4)                                  | 98pp/26cm  | 日本山岳会秋田支部       | 1997 | 発行者寄贈       |
| ウェストン展実行委員会(編)  | 写真展「ウェストンの見た明治・大正の日本」報告書                                             | 16pp/26cm  | ウェストン展          | 1996 | 豊田市国際交流協会寄贈 |
| Heinrich Harrer | Die Weisse Spinne: Die Geschichte der Eiger-Nordwand Abenteuer Eiger | 231pp/24cm | Verlag Ullstein | 1958 | 購入          |
| Toni Hiebeler   |                                                                      | 155pp/26cm | Albert Mueller  | 1973 | 購入          |
| Sten Bergman    | Sport & Exploration in the Far East                                  | 246pp/21cm | Methuen         | 1933 | 購入          |
| Anderl Heckmair | Die Drei Letzten Probleme der Alpen                                  | 80pp/23cm  | F.Bruckmann     | 1949 | 購入          |
| M.S.Wellby      | Through Unknown Tibet                                                | 440pp/24cm | T.Fisher Unwin  | 1898 | 購入          |

# 会務報告

## 【三月・理事会】

日時 三月十九日(木) 十八時三十五分～二十時四十分

場所 日本山岳会 一〇四号会議室

出席者 村木会長、宮下、中村、斎藤各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、伊藤、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉大倉、村井、大森、神崎各常任評議員「委任」松浦、水野各理事、重廣常任評議員

## 【審議事項】

(一) ウェストン写真掲載許可願の件

大屋

(概)平凡社より新会社設立によるマルチメディアCD-ROM版百科事典「マイペディア」(仮称)及びCD-ROM版「世界大百科事典」に挿図としてウェストン写真(河童橋そろい踏み)の掲載許可願が(株)日立デジタル平凡社より出された。承認

大屋

(二) 「百名山写真コンテスト」後援依頼の件

加賀市制施行四十周年記念事業の一環として、当市出身の深田久弥氏の著書「日本百名山」の写真コンテストを開催するにあたり、後援の要

請が石川県加賀市長より出された。

①後援としてポスター、チラシ、雑誌広告などへの貴団体の掲載。

②会員の皆様への会報送付時のチラシの同封(送料は加賀市負担)。

③項のみの条件を付けて承認

(三) 「青少年尾瀬国際フォーラム」後援依頼の件

大屋

第六回国際交流青少年体験登山を「青少年尾瀬国際フォーラム」として八月二十日～二十七日に開催する

にあたり、名義後援の要請がHAT-J田部井代表より出された。承認

(四) 平成九年度事業計画(案) 大屋

資料により、各理事において検討の上、各委員会行事修正などがあれば事務局宛提出をお願いする。承認

(五) 平成九年度収支予算(案) 吉永

資料により各担当部門提出予算の審議。予算措置にともない、山研利用と、自然保護活動の関係などで論議があり、財務担当より新年度については、六月理事会にて再審議の要請。

継続審議

\*今年度各委員会支出は三月二十五日までに事務局報告締め切りとする。

\*事業計画書、収支予算書、議事録の文部省提出にあたり、署名人は大屋、吉永両理事とする。承認

(六) ネパールの自然保護「キング・マヘンドラ・トラスト」の件 大屋

表記の日本委員会(KMJT)再

構築については、日本ネパール協会が主発起人となるが、これまでの経緯から本会に対しての発起人要請が「KMJT再構築の推進を考える有志一同」から出された。継続審議

(七) 新年度役員選任の件 大屋

三月二十六日常務理事会を経て、三月二十九日評議員会議での推薦審議を受けて、五月十七日の通常総会に臨むこととなる。承認

(八) ネパール山岳協会よりの書簡の件 大谷

五月二十九日のエベレスト・デーを中心に一週間、カトマンズでイベント開催にあたり、本会に対して参加要請依頼があった。継続審議

【委員会報告】

●総務委員会・中川

①二月二十二日(出) グリーンホテルで全国支部事務局担当者会議を開催。

「日本山岳会各支部の抱える諸問題」について、青森・越後・京都の三支部を中心に活発なディスカッションを行った。

二月二十三日(出) 事務局連絡会議を日本山岳会ルームで開催。約半数の人がルーム入室は初めてで大好評。

②三月十五日(出) 平成八年度後期オリエンテーションを開催。新会員三十二名の出席があり、会長の挨拶、水野理事の記念講演が好評だった。

③五月十七日(出) 支部長会議・日本

山岳会総会 グリーンホテル

●集委員会・中川

①四月十三日(出) サクラハイク 奥多摩浅間嶺 現地集合現地解散

②五月十日(出) 十一日(出) 若葉会山行偵察

五月二十四日(出) 二十五日(出) 若葉会山行 秋田・岩手県境の和賀岳

●医療委員会・堀井

以前、支部長会議でも話題となつた「蜂アレルギー」対策で、営林署職員などが携行の「注射薬(米国製注射器付き)」の個人輸入は、希望者があればまとめて輸入が可能。有効二年で期限経過後は無料交換ができる。(堀井理事宛連絡のこと)

味の技、心でつくる



むさしき 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)  
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

むさしき 日比谷店 (東宝ツインタワービル9F)  
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905  
むさしき 麹町店 (有楽町線麹町駅隣)  
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313  
むさしき 神田西口店 (神田西口通り商店街)  
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015  
友膳ゆうぜん (半蔵門線半蔵門駅3分)  
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

## INFORMATION



## ◆初心者のための山岳写真講座

フィルムビデオ委員会  
いよいよ夏の季節です。本格的な山岳写真に挑戦してみませんか。スライドを上映してわかりやすく解説します。とくに初心者は大歓迎です。

日時 七月二日(火) 十九時より

講師 羽田栄治フィルムビデオ委員長(日本山岳写真協会副会長)

場所 日本山岳会集會室  
会費 五百円(教材費を含む)  
申込 不要・先着三十名限り。

## ◆第六回懇親山行

92同期会

日時 六月十五日(日)

場所 三頭山登山と数馬の湯

集合 都民の森ゲート前 九時三十分

分

問合せ 大貫金吾まで

TEL・〇四八―四七二―二三三九

\*別便で会員各自に詳しい案内書を

送付します。

## ◆奥日光・光徳で懇親の集い

95同期会

昨年好評だった奥日光・光徳の山小屋に同期の皆さんと集い、懇親の一夜を過ごし、翌日周辺の山を楽しむでしょう。

七月十二日(土) 十八時懇親会

十三日(日) 朝食後グループ別に

男体山、太郎山等登山後解散

場所 奥日光・学習院光徳小屋

費用 六千円(一泊三食、飲み物)

差し入れ歓迎

募集人員 三十名(先着順)

申込 氏名、性別、会員番号、年齢、郵便番号、住所、TELを明記の上、

七月三日までにハガキまたは

RAXで福岡孝昭まで 〒一六六

杉並区和田一―三五一―二

RAX・〇三―五三四―八五四四

問合せ 二十一時以降・高木まで

TEL・〇四六六―三六―六四三四

\*申込者には詳細案内を送付します。

\*95同期会では六月に日帰り山行を

計画中です。TEL・〇四八―四六四

―九二四二・木本までご連絡くだ

さい。

## ◆ウエストン写真展・

松本と東京で開催

昨春秋、豊田市で開かれた写真展

「ウエストンの見た明治・大正の日

本」が、同一規模で松本と東京に場

所を移して開催されます。

## ◇松本会場

日時 五月三十一日(土)～六月十五日

(日) 無休

場所 松本市丸ノ内・日本民俗資料

館

主催 ウエストン展実行委員会/松

本市/日本民俗資料館

共催 松本市教育委員会ほか

協力 日本山岳会信濃支部

◇東京会場

日時 六月二十八日(土)～七月六日(日)

月曜休館

場所 東京都写真美術館(恵比寿ガ

ーデンプレイス内)

主催 ウエストン展実行委員会/岳

人・東京新聞・東京中日スポ

ーツ (大森久雄)

◆一九七七年日本K2登山隊の記録

映画「白き氷河の果てに」上映会

本年夏、K2登頂二十周年、パキ

スタン独立五十周年を記念して、K

2のよく見えるカラコルムのスキル

ブルム峰(七三六〇メートル)登山

を計画しました。神奈川ヒマラヤ登

山隊一九九七のお披露目を兼ね「白

き氷河の果てに」の再上映会を行

います。K2とスキルブルムの間に二

十年の歴史が流れ、そこに「夢を育

んできた登山家」の姿を見ていた

きたいと思います。

日時 六月六日(金) 十八時三十分開

場 十九時開演

場所 横浜市教育文化ホール(横浜

市教育文化センター2F)

JR関内駅南口・一分

TEL・〇四五―六七―一三七一七

入場整理券 千円(横浜市内と周辺

の有隣堂各店・IBS石井ス

ポーツ・カモシカスポーツ山

の店横浜店などで販売

主催 神奈川ヒマラヤ登山隊一九九

七 事務局担当・広島三朗

TEL・(昼)〇四二七―四二―六一

一一・相模台工業高校

(夜)〇四六六―四三―〇一七八

◆高橋てる子 山・山の絵展

北アルプス、丹沢四季など油彩約

四十点を展示します。ぜひお立ち寄

りください。

日時 六月十六日(月)～二十二日(日)

十時三十分～十九時(最終日

は十八時まで)

場所 横浜みつい画廊(JR関内駅

北口下車徒歩四分)

TEL・〇四五―二六一―三七二一

◆船越好文山岳写真展

日本山岳写真家の草分けの一人で

当会の永年会員でもある船越氏(八

十九歳)の往年の写真集「雪線」が

テーマです。独特の叙情的モノクロ

ーム写真の美しさを存分に楽しんで

ください。

日時 六月十七日(火)～二十八日(土)



十二時～十九時(日曜休廊、最終日十七時まで)  
場所 ギャラリー・オリブ(渋谷区恵比寿西一―三四―二八) 代官山ファーストビル3F  
(東横線代官山駅下車すぐ)  
\*初日十八時三十分よりオーブニングパーティーを開催します(会費制二千円)

## ルーム日誌

3月 総務委員会  
3日 フィルムビデオ委員会 アル  
4日 パインスケッチクラブ  
5日 青年部  
6日 山の自然学  
7日 フォトビデオクラブ  
10日 アルパインスキークラブ 図  
書委員会  
11日 二火会 アルパインスケッチ  
クラブ 95同期会  
12日 資料委員会 93同期会  
13日 集委員会  
17日 科学委員会 総務委員会 資  
料委員会  
18日 フィルムビデオ委員会 百年  
史委員会  
19日 理事会 三水会  
24日 科学委員会 山研委員会 山

岳編集委員会  
25日 自然保護委員会 山げらの会  
アルパインスケッチクラブ  
27日 データバンク委員会 集会委  
員会  
29日 評議員会  
3月来室者574名

### ■会員異動

#### 物故

島田 秀夫(八八九五) 96・12・12  
西舩 宗光(一四二〇) 96・12・19  
広瀬伊三郎(四七二一) 96・12・30  
藤井 英夫(一〇四二三) 2・26  
田代 実(四五二二) 3・12  
退会(3月31日)  
坂口敬一郎(五八四八)  
宮田 薫(一二三二)  
大越 耀子(八七八七)  
井関 扶(七四三二)  
林 喬雄(一〇九〇六)  
丸山 剛司(九五二一)  
田村 仁(九七一九)  
山田 耕司(一一六四四)  
葉山 杉夫(七五九七)  
岩崎美智子(一一一四四)  
宮原しづ子(一〇八三八)  
大向 省造(一一一七七)  
加瀬 博務(一〇六五八)  
中野 喜美(一一六九三)  
塩田 裕通(一〇七五九)  
秋元 英郎(一〇三二二)

■訂正 六二二号(四月号)一ページ写真説明の「稿高山荘」は「穂高」の誤りでした。お詫びして訂正します。

### ◆編集後記◆

去る五月十七日に平成八年度通常総会が開催され、役員の改選が行われました。これに伴い、私は会報編集担当理事のお役御免となり、後任の村井葵理事にバトンタッチいたしました。

現在手掛けている六月号までが私の仕事で、以後は村井理事が担当いたします。

ついでに、七月号(原稿締切りは六月十日)以降の原稿送付は日本山岳会事務局でなく、必ず左記へお願いいたします。

〒一九四・町田市森野三二二一  
TEL・〇四二七二二四一六六〇六  
FAX・〇四二七二二二一五五二八  
村井 葵苑 (伊藤 敏)

### 日本山岳会報 山 624 号

1997年(平成9年)5月20日発行  
発行所 社団法人日本山岳会  
〒102  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビュウハイツ四番町  
TEL 東京 (03)3261-4433  
FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 村木潤次郎  
編集人 伊藤 敏  
印刷 株式会社 双陽社